総会に出席して

◇総会に出席して

東北大学　医学部
八木　直人

第４回SPring-8利用者懇談会総会は、平成８年１月１１日に、放射光学会年会、PFシンポジウムに引き続き、岡崎の竜美ヶ丘会館大ホールで開かれた。同じ会場で前々日には日本放射光学会の総会、当日の昼にはPF懇談会の総会が開かれており、３日で３回目の総会となった。確かに参加者はほとんど同じなのだから、一緒に並べて開催するのは効率的ではあるが、会計報告を三度も聞かされると違いを思い出すのは不可能である。

その会計報告では、三つの会とも会費の徴収率が問題になっていたのがおかしかった。この分野にマナーの悪い人が多いわけではなく、会費を払わなくても除名されないからなのだろう。これは普通の学会とは違って、とても紳士的である。

さて、報告項目の後には、いくつか興味ある問題が提起された。ひとつは、塩谷氏（運営幹事）が報告された共同利用の手続きに関する問題である。文部省の職員である大学の職員がSPring-8に出張する際の手続きの問題は、５年近く前から話題になっていたが、いまだに解決されていない。共同利用の開始が来年に迫っている現在になっても、文部省・科技庁・JASRI・原研・理研の間で話がまとまっていないようである。これは、来年の総会までには解決していなければ困る問題である。

このあと、科学技術庁の坪井氏から、科技庁サイドの取り組みについての説明があった。現在国会で審議中の予算案の政府原案では、SPring-8には160億円の予算を見込んでいるとのことで、金額を聞く限りは大変に心強かった。

原研の大野氏は、SPring-8の現状と将来についての話をされた。建物の外観は既に完成しており、平成８年末には内部も出来上がるということで、建築計画は順調に進んでいる。アンジュレータの納入も真近であり、建設中のビームラインのコンポーネントの発注も平成７年度中に完了する様子で、ビームラインの建設計画も進んでいる。しかし、ハッチ部分などの建設には利用サブグループの協力が不可欠であり、大学関係者の関与のしかたについては、まだ不明瞭な点があった。

理研の植木氏は、JASRIの所属として、JASRIの現状と将来について話をされた。現在のJASRIの問題点は、このように共同チームとの人の区別が、利用者側から見てよくわからないということにある。JASRIの顔が見えてこないので、放射光研究所の説明をされてもあまりピンと来ない。しかし一方で、JASRI・原研・理研を合わせると既に250人もがSPring-8で働いているとのことで、狐につままれたような気持ちになる。このへんは、来年になれば少しは分かりやすくなることを期待したい。

この総会の特徴の一つは、参加メンバーの平均年齢が高いことである。確かにあまりサイエンスに関する話は出てこないので、若い人の関心が低いのはしかたがないが、彼らの将来を左右するかも知れない重要な話が出ているのだから、他の学会の総会とはわけが違うのである。この点については、もっと宣伝する必要があるだろう。

◇利用者懇談会総会に出席して

姫路工業大学　理学部
鳥海　幸四郎

この原稿は、1月11日の総会の席上で編集委員の一人より依頼されてしぶしぶ引受たのですが、本当は忘れないうちに1月中に書いてしまおうと思っていたのですが、現実には期限ぎりぎりになって事務局の佐久間さんからの再三の催促の後でやっと書いている始末です。もはや総会の記憶はほとんど昇華してしまってほとんど残っていないのですが、それでも残っているところだけ書かせていただきます。

言い訳がましいことから書き初めましたが、私を含めて多くの大学教官は講義、学生指導、学内外の雑用で相当多忙な毎日を過ごしているのではないかと思います。'だから原稿が遅れたんだ'というのではなく、このような大変忙しい研究者が自分の研究をしながらどれだけ時間を割いてSPring-8のビームラインの立ち上げに参加できるのだろうかと考えてしまいます。ビームラインの立ち上げでは相当の長期間、この播磨科学公園都市に留まって仕事をしなければならないと思います。それだけの時間的なゆとりが果たしてあるのだろうか。研究者各人に相当の肉体的および精神的な負担がかかるのではないかと想像してしまいます。この点に関しては、地元の姫路工大理学部の者は、地の利を生かして空いた時間にSPring-8で自由に仕事ができるし、またSPring-8で学生に実験をさせても十分に指導監督することが可能である。しかし、姫路工大理学部と共同チーム、高輝度センターの人間だけでどうなるものでもありません。大阪や名古屋、さらに東京などから相当の時間と交通費をかけても来ていただかなければならないでしょう。これらのことに関連して、総会においてもビームラインの責任者とその帰属に関する問題などとして議論されていたと記憶します。最終的には、研究者各人がどれだけSPring-8を必要としているかといった個人的な問題に帰着されると思いますが、関係者各位にはできるかぎりの配慮を望むところであります。しかし、SPring-8施設の見学に行くと宿泊施設や食堂の建設が目につきます。これは心強い限りです。我々ユーザーにとってはビームラインを立ち上げて実験できるようになって初めてSPring-8は意味を持ってきます。仏を作って魂入れずではどうしようもないので、これからがむしろ本番であると肝に命じているところです。

もう一つ気になっていることがあります。それは、高輝度光科学研究センターと共同チームとの関係です。11本目以降のビームラインは誰が作るのか、誰に予算申請するのか、ビームラインの維持管理は誰がするのかなど、大変に気にかかるところです。共同利用機器に関しては、必ず誰かが責任をもって管理運営しないと十分な性能が出せないと言うことは周知の事実であろうと思います。この点も総会において問題にされていたと思いますが、是非考慮して欲しいことの一つです。

最後に話はそれますが、SPring-8まで定期バスが通うようになったのはよいのですが、本数が少なくSPring-8まで往復するのにどうしても自家用車が必要です。今後、ビームラインの立ち上げが始まったらこのままでは大変不便なので、シャトルバスの運行などを考えて頂けたらと思います。総会とは直接関係ないことばかり色々と書いてしまった様な気

がしますが、一人のSPring-8のユーザー候補のたわごとと聞き流して頂ければ幸いです。

◇総会に参加して

慶応義塾大学　理工学部
辻　和彦

放射光科学合同シンポジウムの最終日に開かれた総会は、PFシンポジウムの活発な雰囲気を引き継いで、具体的な話が多く、SPring-8の建設が本格的になってきたことが感じられた。SPring-8の実現は、既存の放射光施設であるPFに大きな刺激を与えており、競合あるいは共存を意識した改革を引き起こしている。Spring-8が従来の研究の延長だけでなく飛躍をもたらすためには、ますます智恵をひねることが要求されるようだ。

建設は順調に進んでいるようで、大きな話題となったのは、建設に当たってのユーザーの参加形態であろう。現実の問題として、具体的に誰がどのように参加するかは、多くの所属機関の研究者が協同して建設にあたるときに生じる利害の調整ともからんで、サブグループとしてはむずかしい問題である。科学技術庁からの担当者が詳しく説明する姿勢は歓迎されるが、まだまだ解決すべき問題が多く残されているようで、早急に対策を講じる必要があるような印象を受けた。SPring-8は、国の政策として建設され、より良い研究成果を挙げることが期待されているのであるから、省庁の壁を越えた解決策が講じられるに違いないのであるが、ユーザーとしては余計な心配にエネルギーを消耗することがないように望みたい。

もう一つの話題は、高輝度光科学センター内に作られた放射光研究所についてである。共同チームから財団への連続的移行を意識した組織づくりに、苦心のあとが見られるが、ビームラインの建設が具体的に始まってくると、建設後の運営形態を意識せざるを得ない。装置の継続的改良を考えれば、施設内の担当者が建設に参加し、かつ維持、改良を行うことが望ましい。仕事の役割分担や、人員の配置などの青写真が早急により具体的に明らかにされることを期待したい。

研究者は欲張りであるので、何かが得られても、またその先がほしくなるものである。しかし、よりよい成果を得るためには、たえず前向きに進んでいくことが必要であるのだから、ユーザーとしての声をあげ続けるべきであろう。

今回の総会に出席して、建設が着実に進んでいることを実感するとともに、世界を相手の競争に打ち勝つためには、施設者側とユーザー側との連帯と、より一層の努力が必要であると感じた。